

# Sophia-R

## Sophia University Repository for Academic Resources

Title	ある2歳児とその母によるノ文の使用実態に関する研究
Author(s)	永須, 実香
Journal	Lingua
Issue Date	2020-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	Publisher
URL	<a href="https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20210428010">https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20210428010</a>
Rights	



上智大学  
SOPHIA UNIVERSITY

# ある2歳児とその母によるノ文の使用実態に関する研究

永須 実香

A case study of a two-year old and his mother  
interacting with “No sentences”

Mika NAGASU

## Abstract

Based on natural conversation data, this paper presents a case of a two-year old (“T”) and his mother interacting with “No sentences” (sentences ending with particle “No”). On T’s 2nd birthday, the mother talked to T using many No sentences, to speak for T, supplement T’s speech, describe T’s action and to instruct T. Meanwhile T, between age 2 and age 2 and 2 months, used No sentences most to communicate what he wanted happen (what he wanted to do, or have his mother do), while as he approached age 3 he used the sentences most to communicate the details of his imaginary world. It became evident that the details of the No sentences T frequently used changed as T grew older. Finally, this paper proposes the hypothesis that one of the reasons T used the No sentences from around 2 years and 6 months was to revisit the relationship with his mother who had guessed T’s intent and spoke for T in the preceding three months.

**Key words:** 言語発達、第一言語習得、母親語、幼児言語、文末詞ノ

## 1. はじめに

日本人の幼児が母語習得のきわめて早い時期に、ネ、ヨ、ノを文末に使い始める(大久保1967)ことは長い間よく知られ、ネ、ヨについては誤用もほとんどないということがデータによって裏付けられている(横山1992, 横山1997)。しかし、ノについては、発話データにもとづいて、その実態にせまる研究は少ない。

本稿は、ある2歳児とその母親が、自然会話の中で、文末詞ノを付加した文をどのように使用するか、その実態を発話データに基づいて、明らかにしようとするものである。

本稿の対象とする文末詞ノは、(1) (2) (3) のようなものである。

- (1) そうそう 八百屋さんで買ったの。[3.3-16]<sup>1</sup>
- (2) そおっと持っていくのよ。[3.3-14]
- (3) お肉はたーちゃん持って行ってくれるの? [3.3-14]

文末にあっても(4)のような所有、(5)のような代名詞的用法のノは扱わない。

- (4) コレ ターチャンノ<sup>2</sup> [7.2-19]<sup>3</sup>
- (5) コレ ナアニ? コノ コノ アオイノ [1.31-8]

文全体が断定か質問かは問わず、対象とする。ノヨ、ノネ、ノカナといったノに助詞が後接するものは対象とし、それ以外のノカモシレナイ、ノニチガイナイというような表現類は対象としない。本稿で対象とする(1) (2) (3) のような文を便宜上まとめて「ノ文」と呼ぶ。

母子の発話データとして、国立国語研究所によって刊行された「幼児のことば資料」を用いた。母親の発話データとしては、国立国語研究所(1981)の2歳誕生日のデータの一部を、2歳児の発話データとしては、国立国語研究所(1983)のT児2歳期1年間のデータ全部を使用した。このシリーズは、国立国語研究所言語教育研究部第一研究室のテーマ「幼児・児童の認知的発達と語の意味の習得に関する調査研究」の一部、「幼児の言語及び学習行動の観察」についての研究の資料として作成され、刊行されたもので、昭和49年3月3日生まれのT児の母親に依頼して、基本的には、一ヶ月に随時計2時間、母とのかかわりの中での幼児の生のことばを録音文字化したものである(大久保1984)。さらに、このシリーズは2019年、CHILDES (MacWhinney, B. 2000) に「NINJAL-Okubo」として収録され、

---

1. 下線は筆者による。[3.3-16]は、国立国語研究所(1981)のカード番号。3月3日16枚目の意。
2. 本稿では、母親の発話をひらがなと漢字で、T児の発話をカタカナで表記する。
3. 日付が3月3日以外は、国立国語研究所(1983)のカード番号。対象児は3月3日生まれなので、7月2日は、2歳4カ月齢ということになる。

CHILDESの検索プログラムCLANによる解析も可能になっている。

## 2. 先行研究

大久保(1967)は、1歳1カ月から6歳までのことばを追跡し、幼児の構文と語彙の発達について、広く詳細にまとめた日本の幼児語研究のさきがけである。本稿対象の文末詞ノは「終助詞」とし、初出が1;07<sup>4</sup>であり、「使用頻度の一番高い助詞である」と報告している。大久保(1984)は、上記、国立国語研究所の「幼児のことば資料」シリーズの発話データに基づき、本稿の対象でもあるT児の言語発達全般についてまとめたものである。2歳期までの特徴として、「終助詞の『ね』『よ』『の』などは1歳半過ぎころから使えるようになっている」こと、「2歳前後」に「ものの名前を知りたがる」命名期があること、2歳半前後に「『どうして』という質問形式も使えるようになって」「理由を述べる接続助詞『カラ』を使った従属文が使えるようになる」こと、「2歳半前後から、接続詞の『それで』『だから』『そしたら』『そして』を使い、文と文を結合するようになる」ことなどを報告している。1歳から3歳前半までを通した、動詞の語形変化、下接語の習得順序と出現回数も概観しており、「ね」「よ」「の」もその用例の中に頻出するが、使用実態の詳細な分析まではしていない。

幼児1名の縦断的調査から終助詞ヨとネの獲得を研究したものに、横山(1992)、横山(1997)があり、初出時期が非常に早い(ヨは1;07、ネは1;09)にも関わらず、誤用が全く見られないことを報告している。

白井・白井(2016)は、幼児の「終助詞習得順序」と「認知発達」が関係づけられる可能性があるとして、次のような相関を指摘した。すなわち、第一段階は、発話が「今ここ」に限定される時期で、「よ」「の」「ね」「な」を用い始める。続いて第二段階は、「過去の表現」を始める時期であり、「ぞ」「か(な)」を用い始める。さらに第三段階は、「現在と過去や期待した状況との比較」ができるようになる時期で、「よね」のような終助詞の組み合わせが可能になる時期、また「のに」の使用が始まるというものである。さらに、白井・白井(2016)は、2歳前後の幼児の心的発達程度から、言語獲得期初期のヨやネが、大人の用法と一致するというには無理があるとし、「大人の用法とは一致しないが、コミュニケーションに寄与す

---

4. 1;07は、1歳7カ月齢の意味。以下、同様。

る点においては共通する機能をもつ」という見解を述べている。

2歳児がノをどのように習得するかに着目して、データに基づき、その実態を明らかにしようとした研究に、富岡 (2015)、富岡 (2019) がある。

富岡 (2015) は、ノダ習得と「～ノ」<sup>5</sup>がどのように関連するのかという観点から、発話データベース CHILDES の5つのコーパスを用い、「～ノ」の初出後半年間の日本語母語話者の習得過程の解明を試みている。その結果「～ノ」は、1語文から2語文への移行期に出現すること、所有を表す「名詞+ノ」が先行して現れること、同時期に「～ノ」に評価を表す語や否定を表す語が出現すること、「～ノ」は出現時期において「周囲との間に何らかの齟齬を感じていると思われる場面でも用いられている」ことなどが見出されたと述べている。

富岡 (2019) は、CHILDES の ISHII コーパスを用いた研究で、文末にノが付加された幼児の文のうち、用言に後接し、かつ発話現場に対象物がないものを対象とし、初出から半年間の用例の発話機能を分析した。結果は、「情報提供」40%、「意思表示」16%、「応答」37%、「質問」7%であったという。また、先行発話の繰り返し、変形、代入、言い換えといった「響鳴 (resonance)」<sup>6</sup>がどの程度起こっているかについても調べ、その比率が、63.1%と非常に高かったことを報告している。

ここまで、幼児の言語に関する先行研究について述べた。次に母親の使うノ文に関する先行研究について、述べる。

母親がT児に対して使うノ文は、これまでノダ文と呼ばれてきたものである。ノダ文は、日本語学、国語学の分野において、さまざまな角度から多くの研究がされており、その研究史と個々の位置付けは、井島 (2010) に詳しい。ここでは、本稿で用法の分類用語を援用する吉田 (1988)、吉田 (1994)、吉田 (2014) について述べる。

吉田 (2014) は「日本語文法事典」の「ノダ2」の項目の中で次のようにノダを定義している。

「のだ」とは——活用語の連体形を準体助詞のノで承けていったん体言句とし、そこに述語化要素 (断定助動詞ダまたはネ・サ・ヨなど) を後続させた文末形式。述語化要素が可視的な形態をとっていない (準体助

---

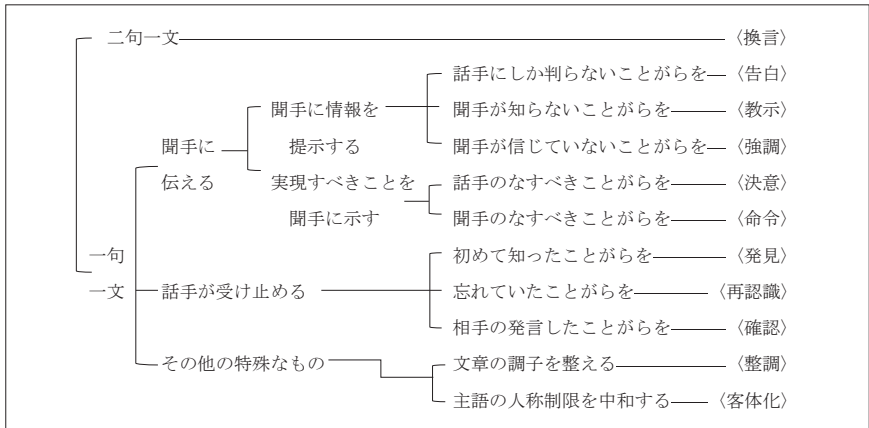
5. 本稿対象の文末詞だけでなく、すべての「～ノ」を対象としている。

詞ノで文が終止する)場合もある。(吉田2014)

吉田(1988)は、ノダ文の「用法を網羅的に示して系統的にまとめる」(井島2010)ことによって、図1のような11の用法に分けた。さらに、吉田(1994)で、その疑問文について、代表的な二分類、「判定要求」と「説明要求」をあげ、「〈判定要求〉疑問文は」「話手があらかじめ相手の回答を予測して用意した“模擬回答”」について「その架空の“回答”が実際に相手の回答たり得るか否かを尋ねる」疑問文、「〈説明要求〉疑問文は文中に不定語<sup>6</sup>を持ち、その不定語の指示対象の特定を相手に求めるという疑問文」であるとした。T児の母親がT児との間で使用するノ文は、吉田(2014)によって定義されるノダ文であり、吉田(1988)の11分類および吉田(1994)の「判定要求」「説明要求」の「ノデスカ型」疑問文に含まれる。

しかし、T児の使うノ文を、母親のノ文と同じであるとみなしていいかについては、議論の余地がある。白井・白井(2016)は、幼児が習得初期に用いるネとヨの機能は、大人のそれとは異なるとしており、富岡(2019)も習得過程の途上にある幼児のことばを分析対象にするにあたって、大人のことばの分析概念をもちこむのは適切でないとしている。ただ、本稿は、大人と幼児のノ文を対象とし、

図1 吉田(1988)によるノダ文の用法分類



6. 「不定語」とは、何、誰、どこ、いつ、どうして、などの語類を指す。

その関係を視野に入れて分析するものであるので、両者の用法を説明する用語をできるだけ統一したい。そこで、これまで大人のノダ文の分類に使用されてきた用語は、本文中では使用せず、一般用語を用いて説明することとし、本文の理解を助けられると思われる場合に、吉田(1988)、吉田(1994)の用語を脚注に示す。

### 3. 母によるノ文の使用実態

ことばの未熟な2歳児に対して、その母親が使うノ文は、どのようなものであろうか。それは、その後T児が使用するノ文のモデルともなるはずである。T児の2歳誕生日に、母親によって発話されたデータを分析して、その特徴を整理する。

#### 3.1 調査方法

母親のノ文のデータは、CHILDES (MacWhinney, B. 2000) のNINJAL-Okuboの1977年3月3日の発話資料を用いて作成した。これは、国立国語研究所(1981)のT児の2歳誕生日の母子の発話データが電子化されたものである。まず、CLAN (MacWhinney, B. 2000)を用いて、母親の発話文全体を抜き出し<sup>7</sup>、次に、母親の発話文のうち「no」を含む文を抜き出したあと、所有を表すものや代名詞的用法など対象外の「no」を含む文を除いて、対象となるノ文を抽出した。

#### 3.2 結果

母親の一日の発話文は全部で6994あり、うちノ文は1387(19.8%)であった。このうちの起床時から昼食時前までの4時間20分に発話された519のノ文について、どのような特徴があるか、見てみよう。

まず、ノに前接する述語が誰もしくは何について述べているかによって、母のノ文を「T児」「T児と母」「母」「その他」の四つに分類した。例えば、T児の動作を表す動詞述語なら「T児」について述べるノ文として、おもちゃや父の動作であれば「その他」について述べるノ文として分類した<sup>8</sup>。結果を表1に示す。

---

7. CLANの操作については宮田ほか(2004)を参照した。

8. ただし、味覚、皮膚感覚、要・不要など対象語を持つ述語については、対象語ではなく、感覚主、判断主について述べる文として数えた。例えば(10)のような場合、母の発話は「牛乳」ではなく、T児の感覚を述べている文として「T児」に入れた。

表1 母のノ文を「何について述べているか」によって分類した結果

主語	T児	T児と母	母	その他	合計
文数	289 (55.7%)	27 (5.2%)	28 (5.4%)	175 (33.7%)	519

母親のノ文の実に55.7%が、T児について述べる文であることが分かった。これらは、さらに、T児の言動との関係によって、次のように分けることができる。

#### A. T児の動き、ことばに反応するもの

##### A① T児の動作からT児の意図を察し、代弁するもの

(6) T: (プリンを残す) 母: もういいの。[3.3-57]

(7) T: (動かない) 母: 行かないの? [3.3-64]

##### A② T児の未完成なことばを補足して完成させるもの

(8) T: ゴン。 母: ごんしたの。[3.3-113]

(9) T: シェータ オッキ 母: 瀬田に行くときに大きいブーブ乗るの?

[3.3-122]

##### A③ T児が自身の感覚、判断、動作などに言及した文をくり返すもの

(10) T: グーニュ アマイ 母: 牛乳 あまいの そう。[3.3-39]

(11) T: オンモ イク 母: おんも 行くの。[3.3-104]

A①とA②の類は、まだ話せないT児になりかわって、母がT児の文を日本語として作りあげ、それにノを付加した形である。察した内容に自信をもって断定する場合もあるし、自信が持てず質問する場合もある。A③の類は、母がT児の言わんとすることを受け取ったことを示している<sup>10</sup>。

母によるA②、A③のノ文は、富岡 (2019) の「響鳴 (resonance)」であろう。T児の発話を変形する、あるいは、そのまま繰り返すものである。T児が発話を行っていないA①は、「響鳴 (resonance)」には含まれないと思われるが、ノ文の用法としては、①②③は明らかに連続したものである。富岡 (2019) は「『ノを含む発話』の総産出数の、期間全体を通しての響鳴率が「63.1%」で高い割合だったとしているが、A①から連続した、A②、③の用法の存在がその要因の一つだと

9. 国立国語研究所 (1981) には、このような動作の記載はない。前後の文脈から筆者が補足した。

10. A①②③とB①は、吉田 (1988) の「確認」、吉田 (1994) の「判定要求」「説明要求」疑問文にあたる。



推測される。

B. T児の動作を描写するもの

B① T児の動作の単純な描写

(12) T：(集める) 母：お手々で集めているの。[3.3-60]

B② T児の動作を見て気づいたことを述べるもの<sup>11</sup>

(13) T：オモチャ 母：おもちゃって言えるようになったの。

[3.3-92]

B①は、T児の動作に反応している点はA類と同じだが、T児の意図を察するのではなく、母の視点からT児の動作を描写して、ノを付加している。B②は、T児の言動を見た母が、やはり母の視点から、自分の気づきを述べるノ文である。

C. T児がすべき、あるいはすべきでないことがらにノを付加したもの<sup>12</sup>

(14) T：(食べる) 母：よくかむのよ。[3.3-17]

(15) T：(強く持つ) 母：強く持たないの。[3.3-125]

Cの類は、Bの類と同様、母の視点から、T児に動作の指示を出すノ文である。「母」自身が主語のノ文とは、以下の(16) (17)、「T児と母」が主語のノ文とは、(18) (19)、「その他」は(20) (21)のような文である。

(16) 今、できないの。[3.3-5]

(17) まだ私はごはん食べてないの。[3.3-27]

(18) ぱんぱんぱんはきょうお天気よくないからできないの。[3.3-75]

(19) そうそう 外で聞こえたのね。[3.3-57]

(20) 今日はね 雲がいっぱい 太陽が出てないの [3.3-80]

(21) あっ 戸をお父ちゃんがあけたの? [3.3-128]

以上、母がT児の2歳誕生日にT児に向かって発していたノ文を整理した。ま

11. B②は、吉田(1988)の「発見」の用法にあたる。

12. Cは、吉田(1988)の「命令」の用法にあたる。

だ、日本語の未熟なT児に向かって、T児の言わんとすることを代弁したり、未完成な文を補足したりするノ文を非常に多く用いているという特徴が明らかになった。

#### 4. T児によるノ文の使用実態

前節で、T児の2歳誕生日に、母がT児に向かって発していたノ文の種類を概観した。さて、これらのノ文を聞いていたT児は、いったい、どのようなノ文をどんな順番で、発話し始めるであろうか。

##### 4.1 調査方法

国立国語研究所(1983)「2歳児のことばの記録」のデータを用いた。3.1と同様の手順で、CHILDES (MacWhinney, B. 2000) に収録されたNINJAL-Okuboのデータのうち、国立国語研究所(1983)に該当する部分を選び、CLANを用いて、T児の発話文、ノ文を抽出した。

##### 4.2 調査結果

国立国語研究所(1983)に採録されたT児の2歳期の発話の総数は、8956であった。一回の発話に含まれる単語数の平均(MLU)は、2;00には1.52であったものが2;07に3.14になった。半年の間に倍になっていくようすが分かる。表2に示す。

表2 2歳期に採録されたT児の月齢ごと発話数とMLU

	2;00	2;01	2;02	2;03	2;04	2;05	2;06	2;07	2;08	2;09	2;10	2;11
発話数	391	1357	275	360	501	515	45	1033	1247	486	1051	1011
平均MLU	1.52	1.85	1.97	2.48	2.68	2.54	2.42	3.14	2.92	3.49	3.42	2.97

次に、T児が発話したノ文の数を月齢ごとに表3に示す。表2の発話総数のデータと合わせて、発話総数に対するノ文の割合<sup>13</sup>も一緒に示す。その割合は、2;00～2;02 (21.8%)、2;03～2;05 (14.8%)、2;06～2;08 (17.1%)、2;09～2;11

13. 月齢ごとのデータ数のばらつきをならすため、三ヶ月ごとに算出した。

(16.6%)となり、T児は2歳期の最初の3カ月間に、もっとも高い割合で、ノ文を使用していることが分かった。

表3 T児の月齢ごとのノ文発話数とその割合<sup>14</sup>

	2;00	2;01	2;02	2;03	2;04	2;05	2;06	2;07	2;08	2;09	2;10	2;11
ノ文	24	267	148	56	73	75	3	187	207	99	188	135
ノ文割合	439/2013 (21.8%)			204/1376 (14.8%)			397/2325 (17.1%)			422/2548 (16.6%)		

さらに、T児のノ文の特徴を探るため、母のノ文と同様、T児が何について述べているのかによって分類した。具体的には次のように分けた。

「T児」について述べている述語とは、T児の動きを表す類(例:タベル、ノム)、T児が自分の動作について、してもいいと言う類、T児の味覚、嗅覚、皮膚感覚を表す類(例:アマイ、クサイ、イタイ)、T児の要・不要や好き嫌いの判断を表す類(例:ホシイ、モーイー)などである。「母」について述べているノ文としたのは、「オカーシャン シュルノ」のように母の動きを指示する類、母の動作について「してもいい」と言う類(スレバイーノ)などである。「T児と母」としたのは、一緒になければ実現できないような動作、たとえば「コチョコチョコスルノ」などである。T児と母以外の第三者、物の動きや性質について述べるもの、すべてを「その他」について述べるものとした。色や明るさを言う類(例:アカイ、アカルイ)などは、外界の物を描写していると考えて、感覚の類とは分けて「その他」に分類した。結果を図2に示す。

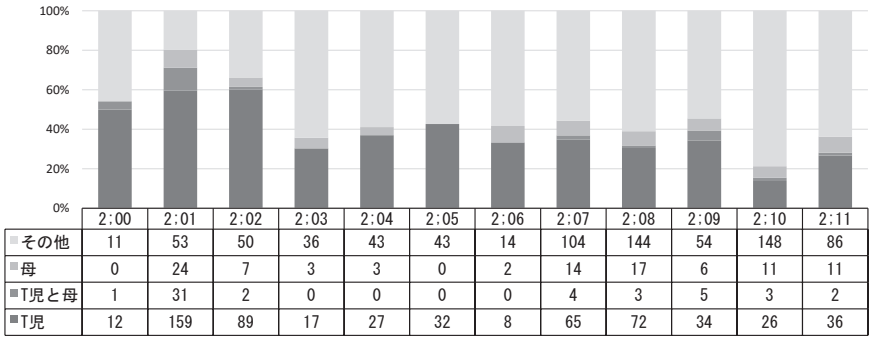
図2を見てまず目にとまるのは、2;00～2;02の三カ月間にT児とその母について述べるノ文の発話の割合が高く、2;01では8割を占めるということである。その割合は2;03以降、4割近辺で推移し、2;10には2割ほどに減っている。

対照的な結果となった2;01と2;10のT児のノ文の詳細について、以下、述べる。

2;01に採録されたT児のノ文、267のうち、「T児」自身について述べる159の発話の内容を詳しく見てみると、T児がしたいことを言う(22)のような例が122で77%を占める。また発話現場で生じた感覚を言う(23)のようなものが11、要・不要を言う(24)のようなものが9、母親の言うことに抵抗する(25)のような「イー

14. 国立国語研究所(1983)にはあってNINJAL-Okuboには記載がない9月7日(2;06)と12月1日(2;08)のデータは、CLANによるMLUの産出のため、含めていない。

図2 T児のノ文を「何について述べているか」によって分類した結果



ノ」が7あった。直前の自分の行動を言う(26)のようなものが、10であった。

- (22) ターチャンモ タベルノ。[4.16-18]  
 (23) ココ カユイノ。[4.4-30]  
 (24) アンパン ホシイノ。[4.18-96]  
 (25) (母：よしなさい。) イーノ。[4.4-52]  
 (26) コレ ターチャン ポイシタノ。[4.18-87]

2:01のT児のノ文のうち、T児と母の両者について述べているものというのは、(27)のような例である。T児がやりたいことのために母の協力を得ようとする場合に、実現したいことがらをノ文で表出するものであり、31ある。

- (27) ジャンケンシュルノ。(母：じゃんけん する？はい) [4.16-25]

母の動作を指示する(28)(29)のようなノ文は、24ある。T児にやりたいことがあるが自分1人では実行できず、母にしてもらいたいことをノ文で伝え、指示を出すようなかっこうになっているものである。

- (28) コレ オカーシャン シュルノ。[4.26-41]  
 (29) コッチホー オカーシャン アタマ シュルノ。[4.16-42]

(22) (27) (28) (29) の類は、T児が発話現場で実現させたいことがらを述べている点で共通している。T児自身が自らするか、母に手伝ってもらうか、母にさせるか、の違いはあるが、その動作をT児が望んでいるという点では同じである。これらは、合わせて177になり、2;01の発話全体の66%にのぼる。これには、T児の発達に関わっているだろう。目や耳が利くようになり、外界への好奇心からやってみたいことが増える時期である。調音器官も徐々に整ってくる中で、T児の中に実現したいことがらが次々に浮かぶようになった時、それまで母親がT児の意思を察し、代弁、補足をするのにたっぷり使っていたノ文で、それを伝え始めるというのは、きわめて自然な流れである。

2;01のT児のノ文のうち、「その他」について述べる文53の内訳は以下のようになっている。下の(30)のような存在に関するものが30、おもちゃの性質や動きについて言う(31) (32)のようなものが10、物について言う「チガウノ」「イイノ」「カタイノ」が各1であった。父やおもちゃの過去の動きを言う(33)のようなものが10あった。

(30) キイロ ジドーシャ ココ アル アルノ。[4.16-60]

(31) (おもちゃの車は) ミンナ トー アクノ。[4.4-3]

(32) (おもちゃの) ジドーシャ モー ネンネ シュルノ。[4.16-61]

(33) コレ オトーション トッタノ。[4.4-57]

ここで、一点、幼児のノ文の性質だけでなく、言語発達を考える上でも興味深い事実として、(34)<sup>15</sup>のような「アルノ」が観察されたことを記しておく。

(34) モット シール (シール もうないわ) マタ アルノ (どこにはる。どこにはるシール? もうおしまいよ) マダアルノ コン コーユーノ シールアルノ コー<中略> (もうないの) マダ アルノ コン (もうないの) マダアルノ <大きな声で> [4.18-29]

母が「もうないのよ」と言っているのに対してT児が「アルノ」を連発し、自分の欲しいものを要求するもので、富岡(2015)の指摘した「齟齬」のある場面の例

15. 二行以上にまたがる長い会話を引用したい場合、連続してこのように記述する。カタカナ書きはT児、カッコ内は母の発話である。下線は筆者によるもの。

である。ないものを「アルノ」と言い張って要求するようなことを大人は、ふつうしないので、日本人であれば直感的に、なんとも幼児らしい用法だと感じるだろう。T児が数少ない手持ちの語彙と文型で精一杯、意思表示している場面である。裏を返せば、T児は、母のノ文の真似でなく、自ら編み出して、こう言っているということになる。2歳児が創造的にことばを使うことを示す好例であると思う。

ここまで、2;01のT児のノ文の内容について述べた。次に、その9カ月後、2;10のT児のノ文の内容について述べる。

2;10に採録されたT児のノ文は188あった。その中で「T児」自身について述べるノ文は、(35)のような自分のしたい動作を言うものが減り、自分自身を客観的に眺めて、体験や能力を言う(36)(37)のようなものが増えている。

- (35) ターチャンモ テレビ ミルノ。[1.3-3]  
 (36) ターチャン アヒル ミタコトナイノ。[1.25-20]  
 (37) コッチカラ ターチャン ヨメルノ。[1.25-25]

「母親」に指示を出す(38)のようなノ文も、2;01同様、使っている。

- (38) オハナシ ターチャンニ オハナシ シュルノ。[1.25-3]

2;10の「その他」に分類された148のノ文のうち、(39)のような発話現場に属することがらを述べる文は15、(40)のような過去のできごとを述べる文は10であり、現実世界のことがらを言うノ文は、二つ合わせて25(「その他」に分類されたノ文の16.9%)に過ぎなかった。

- (39) コノ テープ ウゴクノ? [1.15-19]  
 (40) オトーシャンガ モラッタノ。[1.25-53]

2;10のT児の「その他」に分類されたノ文の83.1%(2;10のノ文全体の57.4%)は、現実には起こったのではないことがら、絵本の世界やT児の想像の世界を伝えるようなノ文であった。想像の世界というのは、例えば、(41)のようなものである。

- (41) プーシャン ネンネシテル (おとうさん ねんねしてるの?) ウン プー  
シャン ネムタクナッチャッタ (ぷうさん ねむたくなっちゃったの)  
プーシャンオナカガ イタイ<sub>ノ</sub> (おなかがいたい の あら) ショイデ ネ  
ンネシテル<sub>ノ</sub> (そいで ねんねしてるの そう。どうしていたくなちゃっ  
たんでしょね) ジドーシャノネ (うん) ワンピーシュガ ヒッコンデル  
トコノネ (うん) アショコデ プチュカッタ<sub>ノ</sub> [2.2-2]

ここで、T児は、寝ているぷうさんを描写した上で、眠たくなったこと、お腹が痛いこと、自動車にぶつかったことを想像し、ノ文を使って、次々に母に伝えている。母が「どうして」と聞く文にもノ文を使って答えている。T児は、2歳半前後に「理由を述べる接続助詞『カラ』を使った従属文が使える」(大久保1984)ようになり、「接続詞の『それで』『だから』『そしたら』『そして』を使い、文と文を結合する」(大久保1984)ことができるようになってきているから、この時点のT児は、ことがらどうしの因果関係についても理解した上で、ノ文をならべて発話しているものと考えられる。

また、特徴的なのは、物に自分で次々に名前をつけていく(42)のような例で、2;10には17ある。母親が物の名前を教えるノ文を真似たものだと考えられるが、自分で新しい名前を考え出して教えようとするところが興味深い。

- (42) コレハ デンシャシャンテユウ<sub>ノ</sub>。(電車さんてゆうの さんをつける) コ  
レハコレハネ(うん)コレハ バチュチュチュチュンテ ユウ<sub>ノ</sub>。(そ  
う)コレハ ヒコウキククンテ ユウ<sub>ノ</sub>。[1.19-35]

このように、2;10のT児は、T児や母以外の「その他」の人や物について述べるノ文を多用し、そこには、T児の想像世界のことから、設定を伝えるものが多く含まれていることが分かった。

T児は、2;01には、自身がしたい動作や母にしてもらいたい動作を伝えるノ文を多用し、2;10には、想像世界の内容を伝えるノ文を多用していた。T児の使うノ文は、その身体的、認知的発達によって、大きく変化していることが明らかになった。

## 5. 2歳半ば以降にT児がノ文を使う動機に関する考察

前節では、T児の多用するノ文の内容が、2歳期の発達にもなって変化することが明らかになった。最後に、2歳期のT児がその内容を変化させながら、ノ文を使い続ける動機について、少し踏み込んでみたい。(43)は、T児が絵本を見て母に説明をしている場面で、ノをつけない文とノ文を順に使っている場面である。

(43) (くらいわね なあに それ?) ココ ヨルダヨ (え?) ヨルナノ [2.23-8]

初めは「ヨルダヨ」、次に「ヨルナノ」を使って、同じことを伝えている。富岡(2019)の言い方を借りれば、T児は「ノがなくても」「目的は果たすことができるのだが、なぜかノを付加する」のである。ここでT児が2回目に、他の文末形式でなくノ文を選択する動機は何であろうか。

この問題を考える足がかりを掴むために、T児自身の味覚、皮膚感覚、思考について、ノ文で言うか、ノを付加しない文(便宜的に「ノなし文」と呼ぶ)で言うか、追跡してみた。結果を表4から表6に示す。「味覚」(表4)は、2歳期全体を通じて、ノ文、ノなし文のどちらも発話がある。「皮膚感覚」(表5)の場合、2;04まで両方を使うが、2;06以降、ノなし文のみである。思考動詞(表6)の類は、初出が2;02で、2;07以降、ノをつけない形で多用し始めている。少ないデータ数ではあるが、この結果の意味を以下のように考えた。まず、2;05、2;06を境に、「イタイノ」「カユイノ」と言わなくなり、また思考動詞「シッテイル」「ワカル」をノなしで多用し始めるという事実から、この間に、T児に何らかの大きな変化があったと推測できる。白井・白井(2016)の指摘にあるように、それはT児の認知発達の一部であると考えられる。それは、具体的にどのような発達だろうか。

表4 T児による「味覚(オイシイ、アマイ、スッパイ、マズイ)」の発話数

	2;00	2;01	2;02	2;03	2;04	2;05	2;06	2;07	2;08	2;09	2;10	2;11
ノ文	2	1	4	0	0	2	0	0	0	2	2	0
ノなし	2	1	8	0	0	0	0	0	2	1	3	8



表5 T児による「皮膚感覚(イタイ、カユイ)」の発話数

	2;00	2;01	2;02	2;03	2;04	2;05	2;06	2;07	2;08	2;09	2;10	2;11
ノ文	0	4	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0
ノなし	0	3	1	0	1	0	0	7	3	0	4	0

表6 T児による「思考(シッテイル/シラナイ、ワカル)」の発話数

	2;00	2;01	2;02	2;03	2;04	2;05	2;06	2;07	2;08	2;09	2;10	2;11
ノ文	0	0	3	0	3	1	0	3	1	0	2	1
ノなし	0	0	2	1	0	3	0	8	14	5	22	16

T児が思考動詞を多用し始めたということは、自らの思考を認識し始めたということであり、泣くこと、笑うことの延長線で感覚や感情を表出しているのとは明らかに違う段階である。それは、自己を自己として認識することの始まりであると考えられ、一方で、母からの分離を意味するだろう。母と一心同体だったT児の中で、自我が育ち、母からの分離のプロセスが進む。と同時に、発話現場でT児の中に生じている感覚や思考というものは、T児自身にだけ生じているのであり、聞き手である母とは共有していないことを把握し、言語的にも言い分けようとするはずだ。そのことが、ノ文の選択にも影響を及ぼしていると考えてみる。T児がノ文を選ばないのは、自我の発達に起因するのではないか。すると、逆に、T児がノ文を選ぶのは、母からの分離が起こる前の状態への回帰、以前の母との関係を取り戻すためではないのかという考えが生じる。T児の中には、母が自分の意思を察しようとし、代弁してくれていた時期のノ文のやりとりの記憶が残っている。だから、ノ文を使うことで、その時期に、一心同体のように理解してくれていた母との関係性を取り戻そうとしているのではないか。このことがT児の2歳半ば以降のノ文使用の動機の一つになっているのではないだろうか。

そう考えると、少なくとも、二つのことが説明可能になる。一つは、2;10にT児が想像世界を伝えるのにノ文を多用した事実である。現実世界は、母と共有しやすいが、想像世界は共有しにくいということをT児は理解している。そこで、母にとっては分かりにくいだろうことを分かってもらおうとして、ノ文を使うのだという解釈が可能になるのである。もう一つは、富岡(2015)の指摘した、周囲との「齟齬」がある場面で、ノ文を多用するという点についてである。(44)は表4の2;05の「オイシイノ」の例、(45)は表6の2;10の「シッテルノ」の例である。

(44) コンド コレ タベヨー (どうれ…たあちゃん おもい パンおあがり  
はい) コノホーガ オイシイ<sup>ノ</sup> (そうお) コノホーガ オイシイ<sup>ノ</sup>

[8.5-8]

(45) ト ニ (どれ?) コレ (これなんてゆう字?) ニ (にじゃない) チョット オ  
カーシャン ニカドウカ ミテ (にじゃないわよ。にっていう字してる  
の?) ニテユウジ シッテル<sup>ノ</sup> [11.3-53]

(44) (45) とも、T児と母との間に、若干の「齟齬」を感じられる状況であると思う。T児は、母に見えていない自分の感覚、思考を、分かってもらおう、共有してほしいという気持ちで、ノ文を選択していると説明できるのではないか。

以上、本稿の分析を通じて得た筆者の仮説を提示した。このような視点で用例を集め、この仮説の是非を検討することが可能であると考え。今後の課題としたい。

## 6. まとめ

T児の2歳の誕生日に、その母がノ文を使う割合は全体の発話の2割ほどだったが、その半数以上は、T児の意思や感覚を代弁、補足するノ文やT児の動作を描写する、指示するものであった。一方、T児は、2歳期を通じて1.5～2割のノ文を使用していた。T児が2;01に使用していたノ文の66%は、自身が発話現場で実現したいことがら(自らの動作、また母に実現してもらいたい動作)を伝えるものであったが、2;10の半数以上は、自らの想像の世界(自分で作った名前や設定、物語など)を伝えるものであり、発達による変化が明らかになった。最後に、2歳期後半のT児がノ文を選択する動機の一つとして、T児がことばを発する以前あるいはその初期に、T児の意思を察し、代弁してくれた母との関係性への回帰志向があるという仮説を提示した上で、その検証方法の方向性を示し、今後の課題とした。

本稿は、一組の母子の発話データに基づいた事例研究である。本稿で示した結果に一般性があるかどうか、より多くのデータを集め、また発達心理学や発達言語学の分野の知見にも照らして検証をする必要がある。それも今後の大きな課題である。

## 参考文献

- 井島正博 (2010). 「ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』第6号 pp.75-117.
- 大久保愛 (1967). 『幼児言語の研究』東京堂書店
- 大久保愛 (1984). 『幼児言語の研究——構文と語彙』あゆみ出版
- 国立国語研究所 (1981). 『国立国語研究所・言語教育研究部資料 幼児のことは資料 (1) 2歳・3歳誕生日のことはの記録』秀英出版
- 国立国語研究所 (1983). 『国立国語研究所・言語教育研究部資料 幼児のことは資料 (4) 2歳児のことはの記録』秀英出版
- 白井純子・白井英俊 (2016). 「幼児の用いる終助詞-終助詞の習得順序と幼児の用いる『ね』『よ』の機能について」『日本語学』35 (11) 明治書院 pp.46-57.
- 富岡史子 (2015). 「第一言語話者におけるノの習得：ノダ習得との関連から」『電子情報通信学会技術研究報告』114巻440号 pp.143-148.
- 富岡史子 (2019). 「第一言語習得における助詞ノの研究——発話機能と使用の変化に注目して」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第47号 pp.51-69.
- 宮田 Susanne・森川尋美・村木恭子 (編) (2004). 『今日から使える発話データベース CHILDES 入門』ひつじ書房
- 横山正幸 (1992). 「幼児による終助詞ネの獲得——R児の場合」『福岡教育大学紀要』第4分冊教職科編 (41) pp.351-357.
- 横山正幸 (1997). 「幼児による終助詞ヨの獲得——R児の場合」『福岡教育大学紀要』第4分冊教職科編 (46) pp.253-259.
- 吉田茂晃 (1988). 「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15号 pp.46-55.
- 吉田茂晃 (1994). 「疑問文の諸類型とその実現形式：ノデスカ／マスカ型疑問文の用法をめぐって」『島大国文』22 pp.1-13.
- 吉田茂晃 (2014). 「ノダ2」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店 pp.481.
- MacWhinney, B. (2000). *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk*. Third Edition. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.